

平成 19 年度
入学試験問題

国 語

特待生
後期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えて下さい。

- (1) 自分をノゾいて八人いる。
- (2) 自分のヒを認め、謝罪する。
- (3) イデンシ治療が進められる。
- (4) 日本人はキンベンだといわれる。
- (5) ささいなことで一生をボウにふる。
- (6) 商品はすべて百円均一です。
- (7) 身の潔白を証明する。
- (8) 母は外聞ばかりを気にする。
- (9) 特に彼の演奏は圧巻だった。
- (10) 法案に異議を唱える。

□ 次の(1)～(10)に入れるのにふさわしいものを下から選んで、記号で答え

て下さい。(ただし同じ記号は一度しか使えません。)

- | | | |
|--------|------|-----------|
| (1) | (かる | ア、ごまを |
| (2) | (きる | イ、板が |
| (3) | (くる | ウ、馬を |
| (4) | (ける | エ、故郷を |
| (5) | (こる | オ、ボールを |
| (6) | (さる | カ、縁を |
| (7) | (しる | キ、ゴール直前まで |
| (8) | (する | ク、インテリアに |
| (9) | (せる | ケ、本のページを |
| (10) | (そる | コ、おのれを |

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

私たちの日常生活では、ことばのきまりというものが習慣的に決まっています。そして、私たちはいちおうきまりの範囲内でことばを使うことで満足していて、それを超えるというようなことは比較的まれです。前章で言いました二つのことばの違いかた——経験が先行してそれをことばで表すことと、ことばが先行してそれが新しい経験を生み出すこと——これは「伝達」と「創造」ということでとらえることもできますし、あるいはことばの「実用的」な働きと、ことばの「美的」な働きと言われることもあります。この後者のほうは詩のことばに典型的に見られるということで、ことばの「詩的」な働きという言い方をすることもあります。

私たちのことばについての認識は、ふつうその「実用的」な働きのほうに大変かたよっていて、もう一つの「詩的」な働きのほうは忘れられがちです。それは、この「詩的」な働きがよく現れるのは、詩のことばであるとか、子どものことばとかどちらかといえますと、ことばの「中心」ではない部分だからでしょう。そういうことばの「詩的」な働きというものが日常のことばにおいてよりも重要な役割を果たすという意味で、子どものことばと詩のことばとは似ているということができません。どうしてそうなるのでしょうか。大人の場合ですと日常的な生活に関する限りは、経験の範囲と、ことばでもって表せる範囲がだいたい一致していると考えてよいでしょう。ところが子どもの場合は、その経験の範囲を表せるだけのことばの能力がまだ十分発達していない。その一方では子どもにとっては毎日が新しい経験の連続です。自分がすでに身につけていることばだけではとても新しい経験を十分に表現することができない。そうしますと、どうしてもことばの枠を破るということが起こるでしょう。子どものことばは、常に何かきまった範囲内だけにとどまっているのではなくて、その枠を破って広がっていくという傾向を示すわけです。

③ これはちょうど詩人の場合と同じことになるのではないのでしょうか。

普通^{ふつう}の人が、日常的な経験を日常的なことばで表現して満足しているのに対して、「詩人」と呼ばれるような人たちは、日常的な経験を超^こえる経験をもつでしょう。そして、それを表そうとすると、もはや日常のことばの使い方では不十分なはずです。A、どうしても、日常のことばの枠を超えるということが必要になってくるでしょう。このように考えますと、詩人の場合と子どもの場合はある意味で非常によく似た^{じょうきょう}状況にあるということになります。

B、詩人の場合はそこにとどまらないでしょう。新しいことば遣^{づか}いで新しい経験が表されるということは、新しいことばの使い方^{つか}で新しい経験を創^{つく}り出すことができるということでもあります。ことばが先行して新しい意味を創^{つく}り出すという働きが浮^うかび上がってきます。詩、とりわけそれが「ことば遊び」とか「ナンセンス詩」^{*}とかいわれるような場合^④のものでは、そのようなことばの働^{はたら}きがいちばん純^{じゆん}粋^{すい}な形で出てきます。「ナンセンス詩」とか「ことば遊び」というのは決してつまらないものではなく、むしろそれは私たちが日常のことばについては経験していないことばのもう一つの重要な側面、つまり C 的な面、があるのだということ——それをはつきりと教えてくれるからです。^⑤

(池上嘉彦「ふしぎなことば ことばのふしぎ」)

※ナンセンス……くだらないこと

問一 —— 線①とありますが、「ことばの『実用的』な働き」がよく現れるのは、どのようなことばですか。次から適切なものをお、だけ選んで、記号で答えて下さい。

- ア、日常のことば
- イ、詩のことば
- ウ、ことばのことば
- エ、大人のことば

問二 —— 線「後者」と熟語の構成が同じものを次から選んで、記号で答えて下さい。

- ア、天地
- イ、永久
- ウ、外国
- エ、開場

問三 —— 線②とありますが、その理由を本文中の言葉を用いて三十五字以内で答えて下さい。

問四 —— 線③とは、どういうことですか。くわしく説明して下さい。

問五 ——

A

・

B

 にあてはまる語をそれぞれ次から選んで、記号で答えて下さい。

- ア、ところで
- イ、しかし
- ウ、それとも
- エ、そこで

問六 —— 線④とありますが、「そのようなことばの働き」とはどのような働きですか。具体的に説明した部分を本文中から二十五字以内で探し、最初と最後の五字を答えて下さい。

問七 ——

C

 にあてはまる漢字二字を本文中からぬき出して下さい。

問八 —— 線⑤の主語にあたる部分を次から選んで、記号で答えて下さい。

ア、「ナンセンス詩」とか「ことば遊び」 イ、私たち

ウ、日常のことば

エ、ことばのもう一つの重要な側面

問九 次のうち、本文の内容と一致するものには○を、一致しないものには×をつけて下さい。

ア、「伝達」とは、経験をことばで表現することだととらえることもできる。

イ、大人は「詩的」なことばを使わないものだとは認識することができる。

ウ、「詩人」という職業は、日常的事ことばの枠を破らなければ成り立たない。

問十 この文章につける表題として適切なものを次から選んで、記号で答えて下さい。

ア、ことばの「実用的」な働き イ、ことばの「詩的」な働き

ウ、「詩人」のことば

エ、子どものことば

四 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

玲の母である美々と、千波（トムさん）と牧子は高校時代からの親友である。父親の類と血がつながっていないことを知った玲は、母（美々）の親友である千波の家を訪ねる。千波は、健康診断で病気が発見されたため入院していたが、今は退院している。

あと、五分ぐらいあれば着ける——というところで、電話を入れてみた。千波が出た。玲は名乗って、これから行っていいか、と聞いた。

「いいわよ。今、どこ？」

千波が、いつもよりゆっくりと話しているように思えた。

「近くまで来てるんですけど——」

そう口にしてから、夕食時であることに気づいた。

「美々ちゃんも「緒」？」

首をかしげているような、千波の調子だった。

「いいえ、一人です」

口調は取り繕いようがなく、沈んでしまう。母と古い付き合いのトムおばさんなら、今、自分の胸にのしかかっている件についても、よく知っている筈だ。わずかなほめかしだけで、何故、自分が来たかを察するかも知れない。それならそれでいい。察してもらった方が、話しやすい。

「どうかしたの？」

A

千波は、「拍置いていった。」

「御飯、食べた？」

「いえ」

「一緒に食べない？ 一人でも寂しいから」

食欲はなかったが、そういわれると空腹は感じた。欲求とは別に、何か入れた方が、体にはいいのだろう。素直に《はい》と答え、携帯のスイッチを切り、しばらく歩くと、もう千波の家だった。

「いらっしやい」

出迎えた千波は、玄関先の明かりのせい、肩先に力がないように見えた。

千波が先に立って、台所に招く。途中から、懐かしい香りに気づいた。

「夕方、帰って来て、今ね、さばの味噌煮を作っていたの」

「ああ……」

① 学食でも、家でも食べる。日常の、最も、ありふれたおかずのひとつだろう。

「秋さば、冬さば、春さば——なんていうけど、今は一年中あるものね。——何だか、急にこれが食べたくなっちゃったのよ」

② どういうわけか、突然、ある食べ物を無性に欲することは、玲にもある。千波は続けた。

「——牧子の作った詩を、ふと思い出したの」

「牧子おばさん、詩もやるんですか」

千波は、笑って、

「詩っていうより、替え歌だな」

平たい鍋のさばを、木杓子を使って皿に移しながら、千波が小声で歌い出した。

——月の砂漠を さーばさばと……

玲は、聞き慣れた文句が途中から変わったので《あれっ?》と思った。

千波は、皿をテーブルに置いて、続けた。

——さばのー 味噌煮が ゆーきました。

玲は小さく笑って、

「さばの味噌煮って、足がないのに、どうやって歩くんでしょうね?」

「飛んで行くのかも知れないよ」

「おかしいけど、……何だか哀しい。曲のせいかなあ」

千波は、温かい御飯と豆腐の味噌汁を出してくれた。

「まあ、——なかなか、人生、《さばさば》とはいかないからね」

「これが、牧子おばさんの作詞なんですか」

「そう。——さきちゃんが、まだ小さい頃、台所で歌ってあげたらしい」

「さばの味噌煮を作りながら？」

「うん」

食べながらの話になる。胃の辺りが重いけれど、少しずつなら入る。

「《もう忘れてるか》と思ったらね、寮に行く前の晩、さきちゃんが、この歌のこと、いい出したんだって」

「……さば、食べてたんですか？」

「わたしも、そう聞いた」

「思いますよね」

千波は頷きながら、

「でも、食べてたのはカツだって」

「ああ。……出発だから、縁起物？」

「らしい。——でね、そのカツを食べながら、味噌煮の歌の話をしてくれたって。――

――何だか、しみじみ嬉しかったって」

「……………」

「本当に小さな、次の日になったら忘れちゃうようなことだよ。——でも、そんなちっけな思い出が、どういうわけか、いつまでも残ったりする。——小さなことの積み重ねが、生きてくってことだよ。そういう記憶のかけらみたいなものを共有するのが、要するに、共に生きたってことだよ。——早い話が、玲ちゃんがおばあさんになって、台所でさばの味噌煮を食べる時、ふっと、わたしのこと思い出してくれるかも知れない。その時わたしが、短い時間でも、そこに蘇るんだ。——《どう、味

噌煮、おいしい?》って」

「おいしいです」

「ありがとうございます」



お茶になった。玲は、薄手うすての茶碗ちやわんから立ちのぼる湯気を見つめながら、いった。

「わたし、聞いちゃったんです」

千波は、慎重しんちように次の言葉を待っている。その様子に、玲は、《確③かめに来たようないい方をしては、いけない》と思った。そんなことをしたら、トムおばさんを、不当に苦しめることになる。

「——わたしの父のことです。今日まで、《お父さん》が《お父さん》だと思って来ました。だから、正直いって、頭がぐらぐらするようで、自分の足場が、急に無くなったような気がするんです」

千波は、ゆっくりといった。

「お父さんに聞いたの?」

「いいえ。バイト先で、いわれちゃいました。事情を知ってる人が、たまたま来ちゃって……」

「お父さんから聞きたかった?」

「それは……」

誰からでも、知らされたくはなかった。

「でもね、お父さんお母さんからでも、もっと早く、——例えば小学生の頃、聞かされていたら、ショックは、ずっと大きかったと思うよ」

「……はい」

あの頃の生活範囲はんいは、今と比較ひかくにならないほど、狭せまかった。それだけ、家や親が、心の中で占める領分も広がった。

「だからね、ここまで、いわずにいってくれたのは、間違っただことじゃないと思う。——それから、忘れちゃいけないことがある。夫婦という横の繋がり^{つな}は別として、親子という縦のことだけ考えたらね、玲ちゃんには、類さんと、それから美々ちゃんがいる。でもね、——類さんには、玲ちゃんしかいないんだよ」

「……………」

「人が生きていく時、力になるのは何かっていうと、——《自分が生きてることを、切実に願う誰か^{だれ}が、いるかどうか》だと思うんだ。——人間は（X）みたいで、誰かのそういう願いが、やっと自分を地上に繋ぎ止めてくれる。——でも、そんな切実な願いつて、この世では稀^{まれ}なことだと思つて来た。——母親は、——わたしの母親はね、そう願つてくれたと思うんだ。愛してくれたんだよ、わたしのこと。でも、その母親が倒れて介護^{かいご}をしてて、どうにもつらくなつた時、わたしはね、《逝^いつてくれたら》と思つたことがある。——それだからね、——《わたしがこの世に生きていることを、誰も切実に願つてはくれない》と思つて来た。《それが当然だ》とね」

間は空いたが、返事のしようがなかった。ややあつて、千波は続ける。

「——職場にも、知り合いは大勢いる。《わたしが生きてた方がいいですか?》ってアンケート取つたら、多分、ほとんどの人が、イエスと答えてくれる。——でも、そういうこととは違^{ちが}うんだ。胸の内から湧^わき出る、本当の、ぎりぎりの真情をこめて《生きていて》と願つてくれる人なんて、誰もいるわけない——と思つてた」

思いがけない方に、話が進んでしまった。

「牧子おばさんや、うちの母もですか?」

「そりゃあ、悲しんでくれるとは思ひ、泣いてくれるとも思つた。でも、結局は他人なんだし、今いったような、ぎりぎりの切実さはないと思つた。——不人情じゃない。悪いことでもない。それが、当たり前だと思つた。人間てそういうもので、そうでなけりゃ、世の中、やってけないと思つた。——でもね、今度の手術の時、色々、世話をしてくれた牧子が、病室から帰りがけに、ちらりと振り返^ふつた。その目

に、《生きていて》っていう願いがあったんだ。例えば、《自分の腕一本とでも引き換えにして、わたしに生きていてもらいたい》って感じ。——びっくりした。後から来てくれた美々ちゃんにも、そんな感じがあった。意外だったなあ

はた目に強い人間と見えた千波は、自分を実際以上のエゴイストと感じていたようだ。そして、その思いを裏返すように、自分を、一人だと思っていたらしい。

「——で、ね、玲ちゃん。あなたという風船は、確かな、頼れる手がつかんでいる。美々ちゃんもそうだし、類さんもそうだ。これだけは、何があっても揺るがない」

「……はい」

「知りたくないことを、知らされちゃうことってある。それは、とつてもつらいけどね、でも取り敢えずは生きていかなくちやならない。——玲ちゃんをつかむ類さんの手は、絶対に確かなものだ。大事なものは、そのことだよ」

「それは分かります。でも、わたし、……まず今日、うちに帰って、父の顔を、昨日までと同じように見られない気がするんです。それがつらいんです。……いっそ、わたしが気が付いたって知らせた方が、まだすっきりするんでしょうか」

「——その必要はないと思うよ」

「……」

「そうになったら類さんが、今のあなたと同じようになる筈だよ。どうやって、玲ちゃんの顔、見たらいいかと思う。——二人で気を遣い合うより、一人だけの方が、まだぎくしゃくしないだろう」

「……そうですね」

「何が本当かっていえば、玲ちゃんと類さんが親子だつていうのは、もう、本当以上の本当なんだ。その本当にくるまれて、玲ちゃんは大きくなった」

千波は、テーブルの向こうからぐっと身を乗り出し、顔を近づけた。

「——これからは、あなたの方が、その《本当》で類さんをくるんであげる番じゃないかな」

「はい」

「ね、今、類さんにどんな顔するより、先のこと考えたらどう？」

「……えっ？」

「いつか、玲ちゃんが結婚する時が来たら、どうしたって話は出るでしょうよ。その時、黙って、類さんにしがみついてあげなよ。《お父さん、ありがとう》っていう、何よりのお返しになる、いい顔してさ」

やり取りの内容もそうだが、微妙なことを打ち明けて話せただけで、玲の心は幾らか軽くなった。

（北村薫「ひとがた流し」）

※エゴイスト……自己中心的な人。

問一 「A」に入る会話文として最も適当なものを次から一つ選んで、記号で答えて下さい。

ア、……偶然、お父さんと私が本当の親子ではないと知ってしまったんです
イ、……あることを、人に聞かされたんです。わたしのあることについて
ウ、……別に特別な用事があるわけじゃないんです。ただおばさんに会いたくて
エ、……おばさんが聞いても驚くような、すごくショックなことがあったんです

問二 ——線①とありますが、一年の中でその食材が最もおいしい時を何と言いますか。ひらがなで答えて下さい。

問三 ——線②とありますが、このエピソードで千波が言いたかったことは何ですか。本文の言葉を用いて、説明して下さい。

問四 本文には、次の文がぬけています。この文が入る箇所を★印より前の部分から探し、直前の五字をぬき出して下さい。(句読点は一字に含みます)

自分の暗い気持ち、そう見せるのかと思った。

問五 —— 線③とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なもの
を次から一つ選んで、記号で答えて下さい。

ア、両親が隠^{かく}してきた真実を、両親の許可を取らずに、千波に聞くべきではない
ということ。

イ、真実を知った自分の思いを、千波が傷つかないように話さなければならない
ということ。

ウ、周囲の人々に隠し事をされて傷ついたという事実を、伝えなければならない
ということ。

エ、父親が本当の父親ではないのかということ、千波に尋^{たず}ねるべきではないと
いうこと。

問六 —— 線④とありますが、なぜですか。説明して下さい。

問七 (X) に入る漢字二字を本文よりぬき出して下さい。

問八 —— 線⑤「ぎりぎりの切実さ」とありますが、この具体的な内容を十五字以
内で答えて下さい。

問九 —— 線⑥「本当以上の本当」とありますが、どういうことですか。説明して
下さい。

問十 —— 線⑦とありますが、どういふことですか。最も適当なものを次から一つ

選んで、記号で答えて下さい。

ア、真実を告げられた時の心の準備をしておくこと。

イ、真実を隠していた類を許してあげること。

ウ、類を父親として受け入れ、共に過ごしていくこと。

エ、恩返しとして、両親が望む娘むすめになろうと努力していくこと。